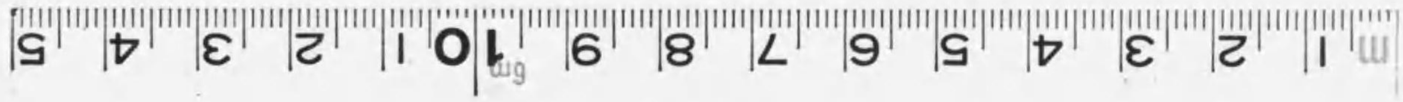
海之圖誌

芝崎昭水

特25
925



特253
925

稗栽培運動は、時局の脚光を浴びて國策化しつゝある。即ちその價値の再認識が急速に進展しつゝあることを物語るもので、多年稗の再認識に努力し來たつた吾々としては邦家の爲に慶賀に堪へない次第であるが、吾人は直接飼料を要求せる農家はさておき、集團勤勞教育の對象としてこれを採り上ぐることを大いに期待した。殊に、吾々は都市の學生の集團勤勞の空閑地利用方法として最適なるを信じ各方面に勸奬したのであつたが、今日迄の實情を見ると地方に於いては着々進行しつゝあるに反し、都市方面に於いては、或は土地入手難に名をかり、或は他の種類の派手な作業を採らんとするものがある。かくしてはからずも吾々は、これを以つて學校當局の時局認識の程を知り得たる如き思がする。曾つて二宮尊德先生は、新田の開發よりも心田の開發が先であると道破されたが、稗栽培運動からも吾々は痛切にそのことを敎へられつゝある。次の時代を背負ふ青年の敎育に當らるゝ各位の反省を望むや切である。

稗と國策

杉野忠夫

世の中から殆んど忘れられかけて居た稗が時局の切實なる要求を母胎として再び大きく更生しつゝあることは、その栽培を提唱し來たつた吾々としては欣快に耐へない所であるが、しかし乍ら、未だ世人、ことに驚くに價することは農業者及び農業指導者迄が、吾々の提唱せる作物たる稗と、雜草たる野稗とを混同して居ることである。先日も稗の試食會をやつた所が、之のことをあつかつた新聞の記事には「雜草と思はれた稗もこんなにうまく食へる云々」と云ふ調子で吾々があの稻の中に生へる野稗を食べようと試みて居る如き錯覺をして居る向さへある有樣で、吾々が提唱して居る稗と云ふのは、あれではなく全く別のものだと云ふことをのみこませるのに一と骨折らね

昭和十年 校 圖

ばならぬと云ふ現狀である。それ故にこそ玆に作物たる稗の價値と時局上のその重要性とが次第に認められてすでに國の中央に於ては次第にその栽培運動を國策化しつゝあることを聲を大にして告げざるを得ないのである。何故に稗栽培運動が國策化しつつあるかその理由をのべて稗栽培普及の一助たらしめんとするのが、本文の目的であるが、その前に、中央における國策化への發展の經過をかいつまんで記しておこう。

吾々が稗の栽培を提唱した前史は他日に讓る。この前史なくしては、かくも短時日の間に中央の問題となり、全國的に普及しなかつたと思ふが、ともあれ大きく表面化したのは、農業報國聯盟が、昭和十四年度の農業報國運動實行計畫綱領を發表した時にはじまると云つてよからう。五月廿七日、農相官邸に於いて開かれた理事評議員會に於いて決定したその計畫綱領の施設事項第三項の「荒蕪地休閑地」ノ生產化運動其ノ他ノ施設」と云ふ所で、

「東北地方及全國都市隣接地方ノ荒蕪地及休閑地等ニ於ケル稗其ノ他ノ食糧、飼料作物等ノ栽培ノ普及促進施設其ノ他地方ノ實狀ニ應ジ增產計畫遂行上效果顯著ナル

施設ヲ行フコト」と云ふことがのべられそこにはじめて稗が頭を出したのである。但し、稗に注意して居た連中にとつては大きな喜びであつたが、それでもこの段階では稗はまだ「其ノ他ノ食糧、飼料作物等」との同居人であつて一つの例として擧げられたと考へられる向が多かつた。換言すれば、荒蕪地、休閑地、生產的利用が主で、稗を作れと大きく出たとは云へない。稗が認められたといふ段階である。これが一歩前進して稗を作れと云ふ事になつたのは、六月十六日農林省の農務局長、畜產局長、經濟更生部長、臨時農村對策部長、馬政局長官の連名で、各府縣知事宛に「稗栽培運動援助方依賴ニ關スル件」と云ふ通牒が發せられたことを以つてその段階に入つたと見ることが出來よう。その全文は左の如くである。

「稗ハ飼料又ハ食糧トシテ其ノ價値相當大ナルモノ有之殊ニ事變下ニ於テ飼料其ノ他ノ不足ヲ憂ヘラル、折柄之ガ生產ヲ擴充シ其ノ利用ヲ圖ルハ極メテ有益ナル次第ニシテ又該作物ハ比較的粗放ナル經營ニ於テ之ヲ生產スルコトヲ得ルモノナルヲ以テ男女青年、學生生徒等ノ勤勞奉仕ニ依リ空閑地等ニ其ノ栽培ヲ爲サシムルニ好個ノ作物

ニ有之ト被認候、近時如斯趣旨ニ基キ社團法人農村更生協會ヲ中心トシ各地ニ稗栽培運動起リ漸次全國ニ普及セントシツツアルト共ニ農業報國聯盟ニ於テモ本年度農業報國運動實行計畫綱領中ノ荒蕪地、休閑地ノ生産化運動ノ重要事項トシテ稗栽培運動ヲ援助スルコトト相成居リ時節柄極メテ適切ナル運動ト被認候條貴管内ニ於テモ適宜指導誘掖方御配意相煩度此段及依頼候也

追而本稗蒔運動ニ要スル種子ニ付テハ農村更生協會無償ニテ之ガ配給ニ當リ居リ尚生産物處理ニ付テハ追テ農林省農業報國聯盟、農村更生協會等協議決定ノ上通知可致候」

かくの如くして遂に稗は國策線上に躍り出したのであるが、しからば何故にかくの如く重要視さるゝのであるか。その第一は家畜の飼料問題が重大なる國家的問題であると云ふことに發するのである。つまり今日吾々が聖戰目的を貫徹し東亞の新秩序建設に突進するのに、家畜の飼料を低廉豐富に得ると云ふことが如何に必要切實なる問題であるかと云ふことを認識するに非れば、稗栽培運動の意義はその半分しか理解出

來ぬであらう。

何人も今日吾々が前古未曾有の大戰役を貫行しつゝあること、ならびにその背後に更に巨大なる敵を控へて居ることを知らぬ者はない。換言すれば吾々は全力をあげて戰爭能力の充實を圖ることが急務なのである。卽ち國民精神の戰爭目的貫徹への統一體制と、食料に不安なからしむることと、軍備の充實と、銃、鍬、ハンマーを振ふ人を備へることである。人と物と心と三位一體になつて突進することが肝心だと云ふことは何人もこれを知つて居ると思ふ。國民精神總動員と云ひ或は國家總動員法の發動と云ひ、或は生産力擴充計畫、或は農林水産物增産計畫、皆この三位一體の實現方法としてあらはれて來たものである。私は、これらの諸運動をして實を結ばしめる鍵も、將又、机上の空論に終らしめるのも、一にかゝつて飼料問題にありと云はんとするものである。家畜の飼料がこんな大きな役割をもつて居ると云へば多くの人は笑ふかも知れない。その笑ふ人はきつと都會人にちがひない。默々として田園に働いて居る人達の、痛切なる聲をきくがいゝ。飼料問題は國家問題であると云ふことは直ちに

判る。先づ順を追ふて説明しよう。

日本の強味は食料の自給が出來るからだとしばしば云はれて居る。しかしそれは決して嚴密なる意味での自給ではない。國民の主要食料たる米について云ふと一ヶ年の消費量は八千萬石を突破せんとしつゝあるのに、國内の生産額は大約六千五百萬石、朝鮮、臺灣よりの移入を合せて辛じて供給し得て居るのである。而して今後この需要量は益々増加するものと思はれる。これに對して増産の餘地如何に關し、當然、外地或は大陸における開拓が考へられなくてはならぬが、さし當たつてすくなくとも内地の生産額そのものを維持し、あはよくば反當收量の増加によつて増産を實現する事は絶對に必要である。このことは、米のみでなく、麥についても同樣である。所が、この米や麥を生産する耕地の地力の維持増進が、國内資材で支持出來て居るかどうか。これが國内生産の肥料で維持増進出來てはじめて食料の自給が嚴密な意味で出來て居ると云へるので、たとへば肥料を外國から買つて、それで農業生産をやつて農産物の面丈見て自給出來たと思つて居ると大まちがひである。私は今日の日本は、決して完全

な意味で食料の自給が出來て居ないと云ふことを聲を大にして警告したいのである。それは、肥料の供給の點で、重大なる缺陷があることである。

試みに最近に於ける肥料の需給狀態を見るに左の如くである。

	販賣肥料	自給肥料	總計
昭和十年	二七六、七〇一千円	三二八、五六〇千円	六〇五、二六一千円
昭和十一年	三二四、九四五	三五五、五六〇	六八〇、五〇五
昭和十二年	三七〇、七九四	三八七、九六〇	七五八、七五四

而してこの三億圓を突破する販賣肥料の中、昭和十二年の輸入額を見ると約三千五百萬圓程の加里肥料と、三千萬圓程の燐礦石——過燐酸石灰の原料——とを第三國より入れて居るのであつて、價額に於いては大したものでないとは云へ、實は販賣加里肥料のそれが全額であり、燐酸化學肥料の八〇%を占むると云ふにいたつては、六千五百萬圓丈の問題ではないことは何人もこれを認めるであらう。窒素、燐酸、加里は所謂肥料の三要素として缺くべからざるものたることは何人もこれを知るが、その三要素の中、漸く窒素肥料のみが略々自給出來るのみで、殘の二要素が全部乃至八割迄

第三國よりの輸入にまつと云ふのは一旦緩急の場合を想像するならば膚に粟を生ずる思がするではないか。又そこまで行かなくても輸入統制を餘儀なくされて居る昨今に於いて供給が窮屈になるのは當然の現象である。當局の努力によつて輸入肥料の供給確保が行はれつゝあることは有難いけれども、統制の強化はともすれば敏速なる配給を困難ならしめるので、時機を逸した施肥は無效であり、農家の困惑は一と通りではない。他方吾が國の耕地の地力は久しきに渡る淺耕と化學肥料の連用によつてその減耗振りは著しきものがあり、今日の農業生産は、土地を肥して作物を成育せしめて居るのではなく、土地を媒體として化學肥料を直接作物に吸收せしめて作物を成育せしめる所謂だまし作りであるので、肥料の供給、就中速效的なる化學肥料の供給が不充分であると作物の上に著しき影響があらはれるのである。かくの如く憂慮すべき面丈を見て居ると際限なく心配せねばならぬ譯であるが、然らば、これを打開する道が無いかと云ふと決して無いのではない、大いにあるのである。しかし今すこしく、この食料自給の困難性が輕々なる問題に非ることをのべておきたい。農業生産力が低下

して、食料供給が不充分になると云ふことは、そんな目にあつたことの無い日本國民にはその實感がピンと來ないが、彼の歐洲大戰の苦い經驗をなめた國々では、切實にこれを感じて居るのである。換言すれば食糧不足は直ちに戰爭の繼續力に大影響を及ぼすので、今日の如く一つや二つの戰場での勝敗で事が決せられず、結局は國と國との戰爭繼續力によつて最後の勝利者が定まる時代になると食料問題は、戰局全體の成否を握る問題なるのである。あれ程戰場での勝利者であつたドイツが何故に戰敗國となつたか、又、ナチスドイツの徹底的な農業保護政策は何に由來するか、實にこの食料自給力の强弱が一國獨立の鍵であるからであるのである。國民思想の問題もこの胃の腑に由來する所大なるは云ふ迄もないが、戰時における都市産業、殊に日本の今日の如く急激なる重工業の發達のもたらす工業勞働者、或は都市生活者の生活振りと農民生活との對比がはげしくなると云ふことが思想上に及す惡影響には實に深甚なるものがある。國民生活の安定上農産物の値上りは抑へられる一方その生産に要する資財は値上り次第と云ふのでは農業者はいつかは、時局をのろふに至る憂なしとせぬ。

農民が一意專心農業報國に突進出來る樣に、肥料の供給に事かゝさぬと云ふこと、或は之れに代るべき方途を講ずることが如何に重大であるかは、この思想問題からも確認されなくてはならぬ。第三に軍備充實の土臺たる重工業確立の爲に今日第三國より如何に多量の資材の輸入が必要であり、その支拂の爲に金の獲得が如何に急務であるか。而してその爲に、外貨獲得上農產物輸出が如何に重要なる地位を占めて居るかを知らなくてはならない。昭和十二年における農產物の輸出額は六億八千八百萬圓に達して居り、各國の趨勢は農產物殊に食料品の買付けが盛であるから農產物輸出の强化はそれ丈國防產業を培養する結果となる。又工產物の輸出力も、生產費の土臺をなす食料品價格によつて左右されるのであるから、實に輸出增進の鍵も亦農業生產にありと、云ふことが出來るのである。かく考へ來たると戰力確保の道は實に農業生產力の增强にあり、農業生產力の增强は生產資材の廉價圓滑なる配給にありと云ふことが云へるのである。所が、この生產資材中の王者たる肥料の問題が前述の如く極めて憂ふべき缺陷を包藏して居るのである。その最も有效適切なる對策は何か。これは自ら鋤鍬

をとれる農業者ならば誰でも知つて居る事であるが、他でもない家畜を飼つてその糞尿を堆肥として田畑に供給する事である。殊に牛、馬等の大家畜を飼育して畜力を利用して深耕を重ねるならば地力の增進は驚くべきものがあり、今日如何に科學が發達しても、地力の維持增進の秘訣は厩肥と深耕とにあることは我が國土壤肥料學界の最高權威たる麻生慶次郎博士の御主張によつても明かである。然るに今日日本の耕地には堆肥厩肥の施さるゝもの頗る僅少であつて全國平均では一反歩當り年百貫にすぎぬ。すくなくとも、これを三百貫程度にせぬ限り、やがては全國の六百萬町歩の美田沃畑は不毛瘠薄の荒蕪と化する憂なしとせぬのである。これ卽ち今日有畜農業の奬勵さる最大の所以であるが、玆にも亦一つの困難事があつて、切角の名案も臺無しとなる憂があるのである。それはこの家畜の飼料、就中、濃厚飼料の自給が出來てないと云ふ問題なのである。昭和十一年に於ける國內の飼料消費總額は三六一九七〇二瓲金額にして一億八千七百萬圓に達して居るが、その內國內生產は二七六一三〇一瓲、金額にして一億二千九百萬圓、滿洲國及關東州より三十三萬瓲二千五百萬圓、第

三國より五十二萬瓲、三千三百萬圓を輸入して居るのである。この輸入に對して國際收支の戰時的統制の必要上第三國よりの輸入を制限し、滿洲の開拓を進めてその濃厚飼料の輸入を增進せんとしつゝあるのであるが、仲々急の間に合はぬと言ふのが現在の實情である。若しこの開發が進むならば、――日本內地人入植豫定地積の十分の一が開發される丈で、その生產量で內地の有畜農業計畫は完成する――日本農業の根柢は盤石不動となるのだが、遺憾乍らこゝ二三年の內と云ふ譯に行かぬ。玆に、今日の非常時局に於いて、手取早く濃厚飼料の大增產の道を講ずることが國家的問題とならざるを得ない事情が生れて來たのである。飼料の供給が低廉圓滑潤澤であると、家畜の增殖は極めて容易である。豚、鷄、の如きは一年に何十倍にもなる。これは老人子供女子の勞働によつて行ひ得る。又廣大なる土地を要しない。しかもその卵、肉は、輸出品として世界的商品であり、外貨獲得の重要物資である。

所が今日の實情はこの飼料の供給が不充分で、增產はおろか減少の危機をはらんで居るのであつて、有畜農業の奬勵の聲の大なるに反比例して有畜農業者の苦惱は次第

に深刻になりつゝあるのである。この危機を一擧打開する道として、吾々は滿洲に飼料增進挺身隊を送ることを提唱すると共に、國內の荒地空地を利用して、飼料增產運動を展開すべきことを提唱し、その最適作物として稗を主張した次第である。

何故稗がよろしいかと云ふ問題については、稗叢書第一輯以降各冊に詳論せられて居るから玆では言及しない。

390
302

昭和十四年七月十日印刷
昭和十四年七月十三日發行

【定價金三錢】

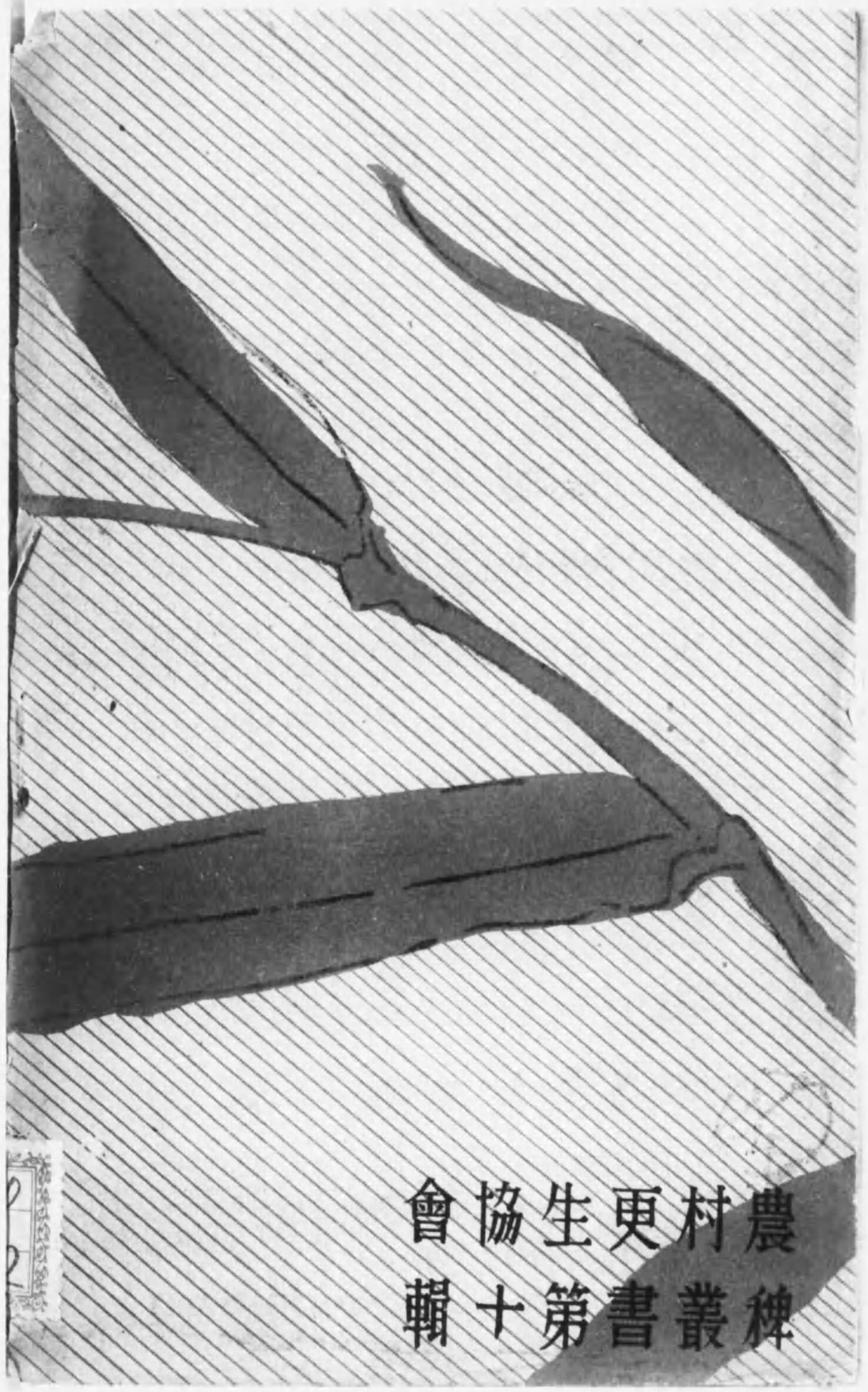
著者　杉野忠夫
東京市麹町區有樂町一ノ九

發行者　杉野忠夫

印刷者　河田保治
東京市淀橋區戸塚町一ノ二二〇

發行所　社團法人　農村更生協會
東京市麹町區有樂町一ノ九（中金ビル）
電話丸ノ内（23）五〇三三番
振替東京八一九五〇番

稗叢書既刊目錄

第一輯　稗栽培運動の提唱　（石黒忠篤）　四六判　一二頁　定價金三錢
第二輯　稗の未來　（柳田國男）　四六判　二三頁　定價金三錢
第三輯　稗の利用價値　（小原哲二郎）　四六判　一〇頁　定價金三錢
第四輯　稗の栽培　（松田延一）　四六判　一八頁　定價金三錢
第五輯　農と稗　（早川孝太郎）　四六判　二九頁　定價金十錢
第六輯　稗と民俗　（早川孝太郎）　四六判　三四頁　定價金十錢
第七輯　稗の處理　（松田延一）　四六判　一四頁　定價金三錢
第八輯　稗と稻　（藤原相之助）　四六判　四九頁　定價金十錢
第九輯　稗の重要性　（古宇田清平）　四六判　一八頁　定價金五錢
第十輯　稗と國策　（杉野忠夫）　四六判　一三頁　定價金三錢
十一輯　稗の精白　（小原哲二郎）　四六判　一八頁　定價金五錢
十二輯　飛驒と稗飯　（江馬三枝子）　四六判　一八頁　定價金五錢

終